

## 石川啄木晩年の生活空間

The living space of Takuboku Ishikawa's later life

水 野 信 太 郎

Shintaro MIZUNO



作品－1 明治村の本郷喜之床正面



作品-2 本郷喜之床2階室内2室



作品-3 本郷喜之床1階床屋店舗



作品-4 本郷喜之床の背面と妻面



作品－5 本郷・喜之床2階床の間





作品-6 ふるさとの住居・斉藤家



作品-7 旧釧路新聞社と啄木立像

日本近代を代表する歌人のひとりである啄木・石川一（たくぼく、いしかわ はじめ1886－1912）は晩年のまる4年と1週間を東京で過した。その間に住まいを都合5回ほど移す。最初に転がり込んだ千駄ヶ谷の新詩社つまり與謝野鉄幹・晶子夫妻の下にあった10日間を除けば、いずれも東京帝国大学の西側にあたる本郷一帯を中心に居住していた。

作品－1は愛知県犬山市内山1番地の財団法人博物館明治村に移築保存されている本郷喜之床（ほんごう・きのとこ）の正面外観である。この店舗併用住宅は、啄木にとって最期から2番目の住まいである。1階左端にある半間（約90cm）幅のガラス戸が、居住者つまり啄木たちの前面道路からの主出入口・玄関である。現在は写真に見られる通り、この建物も啄木自身も多くの人々に囲まれて日々を過している。

石川啄木は、この本郷喜之床の2階和室ふた間を借りて住んだ。明治42年6月16日に北海道函館から郁雨・宮崎大四郎（いくう・みやざきだいしろう）に伴われて、啄木の母・カツと妻・節子と長女・京子の3人が上京する。その家族と暮らすために、この住宅の2階を借りたのである。その前は金田一京助とともに本郷の蓋平館（がいへいかん）別荘に住んでいた。転居した喜之床の部屋のようなすが、作品－2に掲げる「本郷喜之床2階室内2室」である。畳敷き6畳の和室が2部屋つづく居室である。画面では左手に切れているが2室とも1間半ずつの押入があり、その建具は襖で構成されている。

作品－3は床屋1階の店舗である。この理髪店は啄木在住当時、新井こう（あらい・こう）という女性が店の切り盛りをしていた。彼女の夫・新井喜之助の名をとって、床屋の喜之助から「喜之床」という屋号にした。のちの「バーバー・アライ」である。啄木自身は散髪にまつわる歌を幾首もつくっており、床屋との縁が深かった。「喜之床」の店舗は明治期の新しい床屋の姿をよく伝える好例である。大きな鏡、西洋式の椅子など近代という時代を象徴的に示している。なお撮影時の展示内容は、啄木作品から食生活・食品が登場する短歌を選びすぐって解説を付した食材模型を見せていた。このねらいは平成22年12月1日（水）夕刻に岩手県盛岡市内で開催された「歌集『一握の砂』発刊100年記念パーティー」で供された料理のさきがけ的な存在あるいは共通する発想であったように、筆者には感じられる。

本郷喜之床の背面と妻面（作品－4）からは



写真－1 銀座の「石川啄木」歌碑

啄木一家の日常生活が見てとれる。ひとつには2階ガラス窓の下端に見られる透き硝子（すきがらす・透明ガラス）に代表される近代の明るさである。表通りに面した作品-1の側と異なり、家屋裏面のガラス窓なのでこのような構えとしたのであろう。また啄木の家族は食事をこの住宅背面付近で準備したものとされる。厨（くりや・厨房および台所）は母屋（おもや・主屋）の1階には設備されていない。別棟があったのか、いずれにしても水まわりは裏側である。1階右端の下屋（げや）は勝手口、吹き放たれた縁側の左手角がトイレ（便所）である。なお縁側ガラス戸の中が、家主である新井家の居室であった。

本稿の中心的作品が、作品-5に掲げる「本郷・喜之床2階床の間」啄木たち家族の居室正面である。この空間で家族全員の日々が営まれた。最初は4人住まいであったが、明治42年12月20日からは父・一貞（いっせい）も加わり5人家族となる。そして同43年10月4日から同月27日までは長男・真一（しんいち）を含めた6人家族であった。

前述した通り平成22年12月1日は、啄木の第一歌集『一握の砂』が発刊されて満百年目であった。『一握の砂』が出された日、彼ら一家はこの2階家で暮らしていた。啄木が発病した後、2階への登り降りが負担であるという理由から、明治44年8月7日に転居する。引越し先は、終焉の住まい「久堅町」の平家（ひらや・1階建）である。本郷一帯よりも少し西側に位置する小石川であった。その新居で彼が臨終を迎えるのが同45年4月13日である。つまり終（つい）の住まいで啄木が命を繋ぐことが出来たのは、わずか8箇月余りにしか過ぎない。

作品-6は、ふるさとの住居・斉藤家である。この町家形式の旧街道ぞい建築は、啄木が故郷で代用教員時代に住んだ借家である。これが彼にとって、ふるさとで住んだ最後の家であった。現在は岩手県盛岡市玉山区渋民字渋民9番地の財団法人石川啄木記念館敷地内に保存されている。歌集『一握の砂』発刊100年目の時点で、この民家は骨格に関わる全面的な修理と茅葺（かやぶき）屋根の大規模な補修工事が実施されていた。

また旧釧路新聞社と啄木立像（作品-7）は、やはり百年後の釧路である。啄木にとって北海道最後の勤務地・釧路であるが、勤め先であった釧路新聞社（現在の北海道新聞釧路支局）社屋は解体されてしまった。画面左手の赤煉瓦建築は、再現された港文館という建物である。

写真-1に示す銀座の「石川啄木」歌碑は、東京都中央区にあった東京朝日新聞の旧社屋跡に建てられている。啄木の晩年を語る時には、最期の勤務先として明示しておきたい。彼のレリーフと短歌作品「京橋の瀧山町の／新聞社／灯ともる頃のいそがしさかな」が刻まれている。

本稿で発表した写真作品の撮影が許された際、財団法人博物館明治村の当時の館長でいらした飯田喜四郎先生が直々に村内を御案内くださった。喜之床2階の撮影までも同行して下さり、長時間露光の間ずっと同席願った。この紙面を借りて謝意を表するしだいである。

また盛岡での記念行事に際しては、第33回全国町並みゼミ「盛岡大会」実行委員会・盛岡まち並み塾事務局長の渡辺敏男先生にひとかたならぬ御世話になった。かさねて感謝申し上げる。作品-6ふるさとの住居・斉藤家の修理工事は、渡辺先生が直接担当された仕事である。